

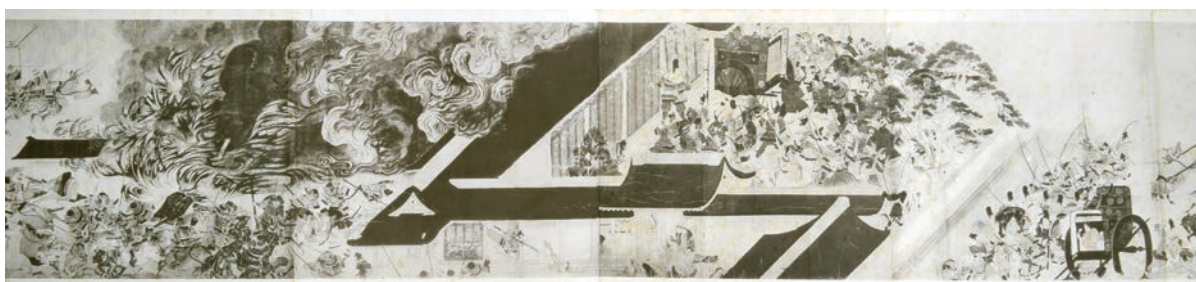
小特集 ◆

源平合戦を 読む

一二世紀後半に起こった源平合戦を記録する軍記物語、日記、絵巻物は、中学校・高等学校の国語（古典）・歴史（日本史）でもしばしば取り上げられます。

合戦の場面に活写される英雄の活力、登場する人びとの心の動き、哀しき運命に心を寄せ、また、それらの作品に取材した時代小説や時代劇、アニメーションなどに心をとくめかせる人は、決して少なくないことでしょう。

本小特集では、筑波大学附属図書館が所蔵する古典籍資料から、現代まで、実に多くの人々に愛され続けてきた源平合戦を描く貴重書・和装古書七点を厳選して紹介します。



1 『平治物語絵詞』（複製）

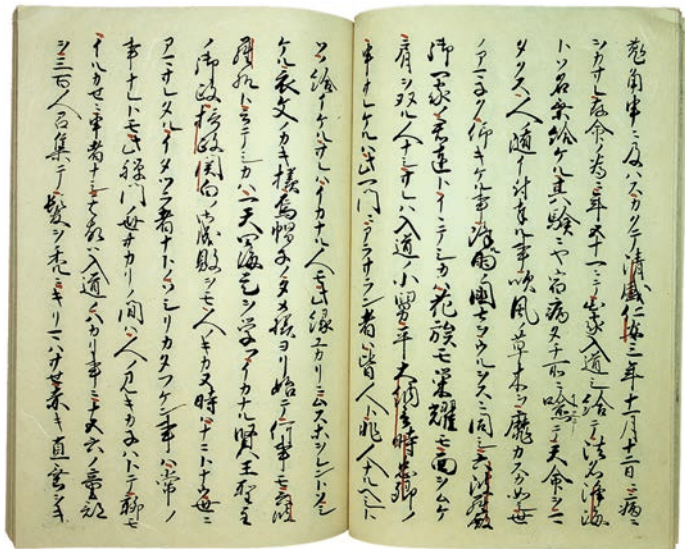
3軸 考古学会 1911年刊

13世紀後半、軍記物語『平治物語』を基に住吉慶恩によって描かれた大和絵様式の絵巻物の複製。巻上（三条殿夜討の巻）・中（信西の巻）は寛政10（1798）年に住吉内記広行が写した帝国図書館（現 国立国会図書館）所蔵本、巻下（六波羅行幸の巻）は出雲松江藩主松平治郷（不昧）が比叡山から入手したという松平直亮所蔵本（後に東京国立博物館へ寄贈）による。源平合戦の発端となった保元・平治の乱は、武士の実力を示す事件であった。本絵巻物巻上には、源義朝が後白河上皇の御所三条殿を夜討ちする場面が描かれている。
〔請求記号 カ 210-332〕

☞ 松下隆章編『平治物語絵巻・蒙古襲来絵詞』（日本絵巻物全集9、角川書店、1964年）。

小松茂美・松原茂・日下力執筆『平治物語絵詞』（日本絵巻大成13、中央公論社、1977年）。

平治物語〔絵巻〕。〔三条殿焼討巻〕、信西之巻（国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11299490>、2020年1月8日）。



2 『平家物語 文禄本』第1(複製)

存 10 巻の内 日本古典文学刊行会 昭和 48(1973) 年刊

(原本: 榎本美濃[写] 文禄 4(1595) 年写)

源義朝に勝利した平清盛は、朝廷内最上位の官職である太政大臣に昇り詰め、史上初の武士政権を樹立した。清盛の女子徳子(建礼門院)が高倉天皇に内入し、ついには外孫安德天皇が即位することになる。平家一門は、王家(天皇家)や藤原摂関家を凌ぐ勢力となり、栄華を極めた。その栄耀から衰亡への推移が描かれる『平家物語』には、清盛の義弟平時忠が「此一門ニアラサラン者ハ皆人、非人ナルヘシ」と豪語したと記されている。奢れる平家に対する不満は、次第に高まっていくことになった。

(請求記号 910.8-F73; 原本請求記号 [ル 140.48](#) / 貴重書)

市古貞次校注・訳『平家物語』1 (新編日本古典文学全集 45、小学館、1994 年)。

梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』1 (岩波文庫、岩波書店、1999 年)。

日本古典文学会編『平家物語 文禄本』第 1 ~ 12 (複製日本古典文学館、日本古典文学刊行会、1973-75 年)。



下 東海・東山・北陸三道諸国源氏并群兵等所、

応早追討清盛法師并從類叛逆事

右、前伊豆守正五位下源朝臣仲綱宣、奉 最勝王勅称、清盛法師并宗盛等、以威勢、起凶徒、亡国家、惱乱百官万民、虜掠五畿七道、幽閉 皇院、流罪公臣、断命流島、沈淵込楼、盗財領国、奪官授職、無功許賞、非罪配過、或召釣於諸寺之高僧、禁獄於修学僧徒、或給下於叡岳絹米、相具謀叛糧米、新百王之跡、切一人之頸、違逆帝皇、破滅仏法、絶古代者也、于時天地悉悲、臣民皆愁、仍吾為一院第二皇子、尋天武皇子旧儀、追討 王位推取之輩、訪上宮太子古跡、打亡仏法破滅之類矣、唯非憑人力之構、偏所仰天道之扶也、因之、如有 帝王三宝・神明之冥感、何忽無四岳合力之志、然則源家之人、藤氏之人、兼三道諸国之間堪勇士者、同令与力追討、若於不同心者、准清盛法師從類、可行死流追禁之罪過、若於有勝功者、先預国使之、兼御即位之後、必隨恩可賜勸賞也、諸国宜承知、依宣行之、

治承四年四月九日

前伊豆守正五位下源朝臣仲綱

〔書き下し〕
下す 東海・東山・北陸三道諸国源氏并びに群兵等の所、応に早く清盛法師并びに從類叛逆の輩を追

討すべき事

右、前伊豆守正五位下源朝臣仲綱宣ふ、最勝王の勅を奉るに称く、清盛法師并びに宗盛等、

威勢を以て、凶徒を起こし、国家を亡ぼし、百官万民を悩乱し、五畿七道を虜掠し、皇院を幽閉して公臣を流罪にし、命を断ちて身を流し、淵に沈めて楼に込め、財を盗みて国を領し、官を奪ひて職を授け、功無きに賞を許して罪に非ざるに過に配す、或いは諸寺の高僧を召し釣め、修学の僧徒を禁獄し、或いは叡岳の絹米を給下し、謀叛の糧米に相具へ、百王の諸を新たにし、一人の頸を切り、帝皇に違逆し、仏法を破滅し、古代に絶する者なり、時に天地悉く悲しみ、臣民皆愁ふ、仍りて吾は一の院第二皇子として、天武天皇の旧儀を尋ね、王位を推し取るの輩を追討し、上宮太子の古跡を訪ね、仏法破滅の類を打ち亡ぼさんとす、唯人力の構へを憑むに非ず、偏に天道の扶けを仰ぐ所なり、これに因りて如し 帝王に三宝・神明の冥感有らば、何ぞ忽ち四岳合力の志し無からん、然らば則ち源家の人、藤氏の人、兼ねては三道諸国の間、勇士に堪ふる者は、同じく与力し追討せしめよ、若し同心せざるに於いては、清盛法師が從類に准へ、死流追禁の罪過に行ふべし、若し勝功有るに於いては、先づ諸国の使節に預け、兼ねては御即位の後、必ず思ふに随ひて勸賞を賜はるべきなり、諸国宜しく承知すべし、宣に依りて之を行へ、

治承四年四月九日

前伊豆守正五位下源朝臣仲綱

3 『東鑑』 目録・巻 1

52 卷 25 冊の内 [京]: 野田庄右衛門 寛文元 (1661) 年刊

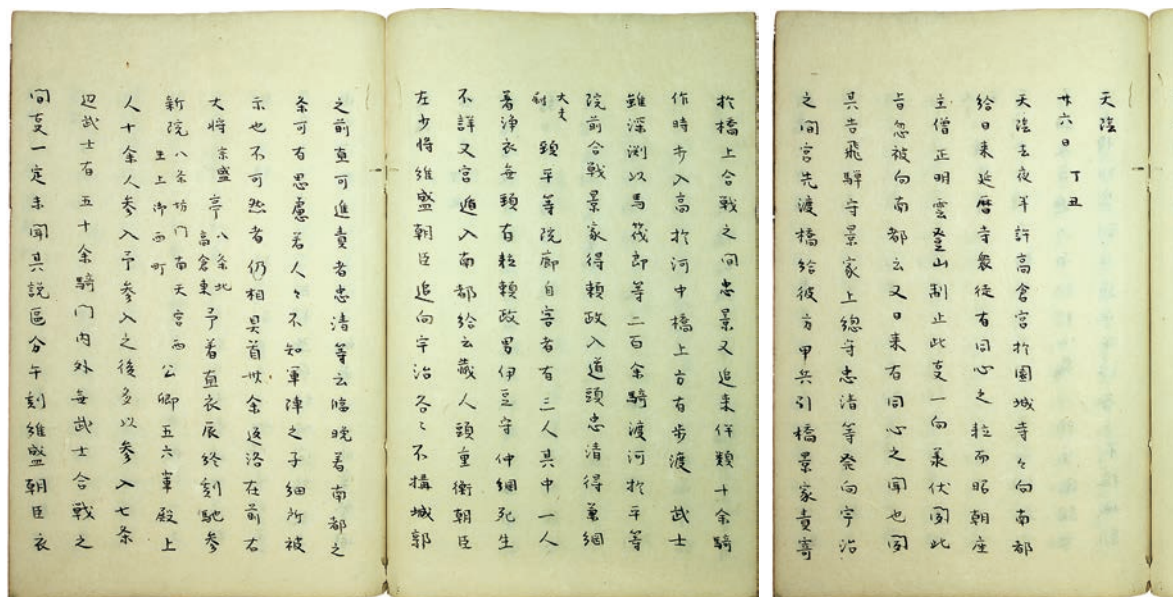
平家への不満を募らせた源頼政とその子仲綱・兼綱らは、後白河法皇皇子以仁王 (最勝王) を擁立し、平家打倒を企てる。鎌倉時代の将軍の事跡を編年体で記した史書である『東鑑 (吾妻鏡)』の治承 4 (1180) 年 4 月 27 日条には、以仁王が仲綱を奉者とし、東海道・東山道・北陸道諸国に点在する源氏に向けて 4 月 9 日に発した令旨が引用される。天武天皇・聖徳太子の故事に触れつつ、天皇・仏法に反逆した清盛とその一門の追討を命じる。この令旨は、亡き源義朝の弟行家によって各地へ伝えられることとなる。

〔請求記号 ヨ 380-17〕

☞ 黒板勝美・国史大系編修会編『吾妻鏡』第 1 (新訂増補国史大系 32 卷 1、吉川弘文館、1974 年)。

五味文彦・本郷和人編『頼朝の挙兵』(現代語訳吾妻鏡 1、吉川弘文館、2007 年)。

高橋秀樹編『新訂吾妻鏡』1 頼朝将軍記 1 (和泉書院、2015 年)。



廿六日 丁丑
天陰、去夜半許、高倉宮於園城寺、日向南都給、日来延曆寺衆徒有同心之疑、而昭朝、座主僧正朝雲登山、制止此事、一向承伏、聞此旨、忽被向南都云、又、日来有同心之聞也、聞其告、飛驒守景家・上総守忠清等、発向宇治之間、宮、先渡橋給、彼方甲兵引橋、景家責寄於橋上、合戦之間、忠清又追来、伴類、十余騎作時、打入高於河中、橋上方有步渡、武士雖深淵、以馬筏、郎党、二百余騎渡河、於平等院前合戦、景家得頼政入道頭、忠清得兼綱・頼朝、平等院廊自害者有三人、其中一人、着淨衣、無頸、有疑頼政男伊豆守仲綱、死生不詳、又、宮遁入南都給云、藏人頭重衡朝臣・左少將維盛朝臣、追向宇治、各々不構城郭之前、直可進責者、忠清等云、臨晚、着南都之条、可有思慮、若人々不知軍陣之子細、所被示也、不可然者、仍相具首卅余返洛、在前右大將宗盛亭（八条北、（後略）
（書き下し）
天陰る、去んぬる夜半許、高倉宮園城寺に出で、南都に向かはしめ給ふ、日来延曆寺衆徒同心の疑ひ有り、而して昨朝、座主僧正明雲山に登り、この事を制止し、一向承伏す、この旨を聞き、忽ち南都に向かはると云々、又、日来同心の聞こへ有るなり、その告げを聞き、飛驒守景家・上総介忠清等宇治に発向するの間、宮、先づ橋を渡り給ふ、彼方の甲兵橋を引く、景家橋上に責め寄せ、合戦の間、忠清又追ひ来たる、伴類十余騎作の時、馬を河中に打ち入れ、橋の上方瀬を歩き渡る有り、武士深淵と雖も、馬を以て筏とし、郎党二百余騎河を渡る、平等院前に於いて合戦、景家は頼政入道の頸を得、忠清は兼綱（大夫尉）の頸を得、平等院廊に自害する者三人有り、その中の一人、淨衣を着、頸無し、頼政男伊豆守仲綱と疑う有り、死生詳らかならず、又、宮は南都に通れ入り給ふと云々、藏人頭重衡朝臣・左少將維盛朝臣、宇治に追ひ向かひ、各々城郭を構へざるの前、直ちに進み責むべし、てへり、忠清等云はく、晩に臨み、南都に着くの条、思慮有るべし、若し人々軍陣の子細をしらずんば、示さる所也、然るべからず、てへり、仍りて首卅余を相具し、洛に返す、前右大將宗盛亭（八条北、高倉東）に在り、（後略）

4 『山槐記』 第7冊 治承4年5月

10冊の内 向陽林子（林鷺峰）[写] 明暦4(1658)年写

公卿中山忠親の日記で、儒学者林鷺峰による写本。治承4(1180)年5月26日条には、以仁王（高倉宮）らが園城寺から南都（奈良）へ向かう途中、宇治川で平家方の藤原（伊藤）景家・忠清に追討され、戦ったことが記録されている。源頼政は関白藤原頼通が建立した平等院で戦って敗れ自害、兼綱は討ち死にする。脱出できた以仁王も間もなく討ち取られたが、この後、伊豆（神奈川県）の頼朝や木曾（岐阜県）の義仲、平泉（岩手県）の義経など各地の源氏が立ち上がり、平家を追い詰めていった。

〔請求記号 ヨ 216-32〕

増補「史料大成」刊行会編『山槐記』3（増補史料大成 28、臨川書店、1965年）。



はしべんけいやま
橋弁慶山

源義経が京・五條の橋で武蔵坊弁慶と勝負したことを描く謡曲「橋弁慶」に取材する昇山。
ごじょう むさしぼうべんけい
かきやま



じょうみょう やま
浄妙山

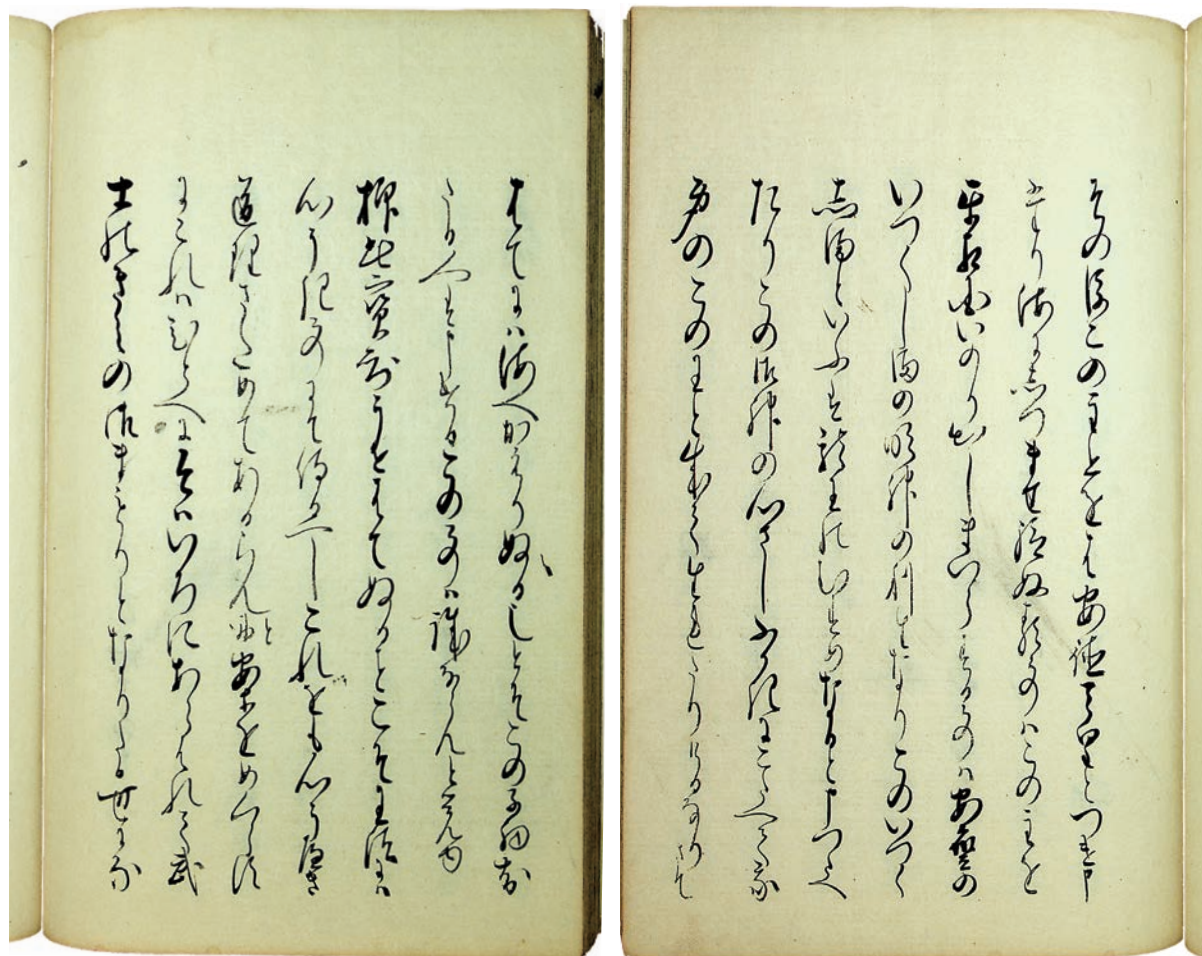
『平家物語』に記された宇治川合戦における筒井浄妙坊・一来法師の先陣争いに取材する昇山。
ついで いちらい



〈参考〉『山鉾由來記 (都祇園会図絵)』
やまぼこゆらいき みやこぎおんえずえ

2巻1冊 〔京〕：山本長兵衛ほか 宝暦7(1757)年刊

本資料は、日本を代表する都市祭礼である京都・祇園祭の図説。後祭に巡行する橋弁慶山・浄妙山のように、日本の祭礼に繰り出す出し物には、源平合戦に取材した意匠が用いられることがある。ここでは、『山鉾由來記』と現代の山(令和4(2022)年撮影)を見比べてみよう。
 (請求記号 [ハ240-104](#))



その後、この主上を安徳天皇
とつけ申たり、海にしつませ給
ぬる事ハ、この主を平相国（平清盛）の
り出しまいらする事は、安芸の
いづく（厳島）しまの明神の利生なり、こ
のいづくしまといふは、竜王のむ
すめなりと申つたへたり、この御
神の、心さしふかきにこたへて、
我身のこの王と成て生れたりける
なり、さてはてにハ海へかえりぬ
る也とぞ、この子細知たる人は申
ける、この事ハ誠ならんと覺ゆ、

6 『愚管抄』 卷6

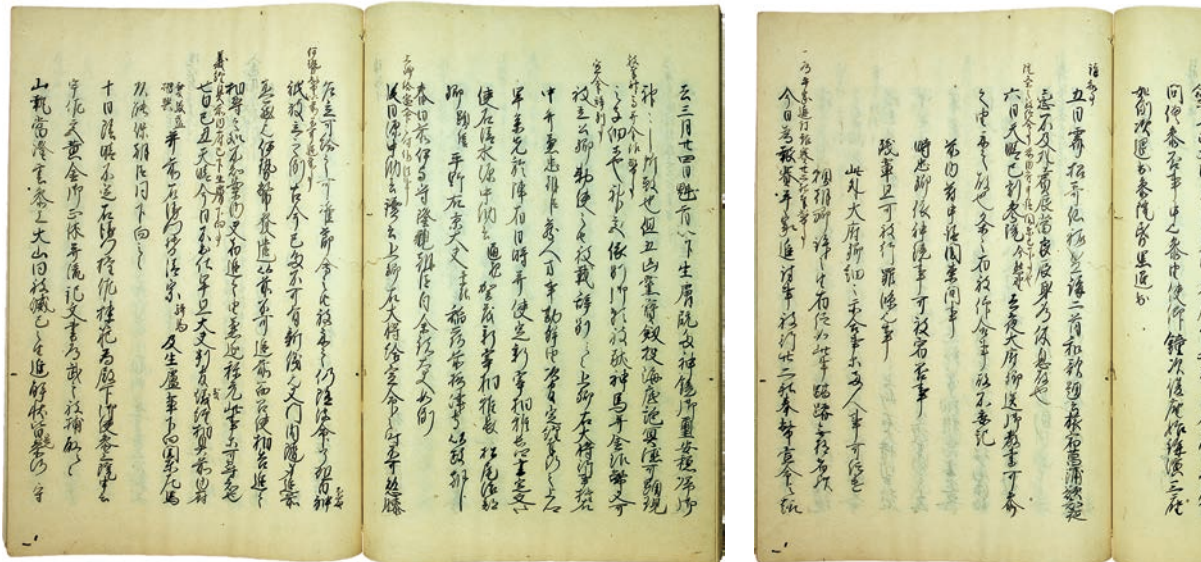
6 卷附録 2 卷 14 冊の内 江戸期写

天台座主慈円（諡号 慈鎮和尚）の史論書の写本。慈円は摂関家の藤原忠通（ただみち）の男子で、『玉葉』の著者九条兼実の同母弟。未法思想と「道理」とに重きを置き、貴族の時代から武士の時代への転換を叙述するが、源平合戦最後の戦いとなった壇の浦（だんのうら）における平家一門の惨劇にも及んでいく。そこでは、幼き安徳天皇の入水について、天皇は平清盛の祈請により竜王の女子である安芸（あき）（広島県）の厳島明神（いつくしまみょうじん）が利生した存在であるから、海の底へ帰っていったと解釈している。悲劇を何とか納得しようとする慈円の思いが察せられる。

〔請求記号 [ユ 380-2](#)〕

☞ 岡見正雄・赤松俊秀校注『愚管抄』（日本古典文学大系 86、岩波書店、1965 年）。

大隅和雄訳『愚管抄—全現代語訳—』（講談社学術文庫、講談社、2012 年）。



六日 天晴、(中略)

為平家追討報賽廿二社奉幣事

今日、為報賽平家追討事、被行廿二社奉幣・宣命之趣、去三月廿四日、魁首以下生虜既多、神鏡・御璽安穩歸御、神々所致也、但五凶党、宝剣投海底訖、冥徳可顯現之子細等也、(後略)

義経具前内府已下生虜下向事

七日 己丑 天晴、今日不出仕、早旦、大夫判官儀経、相具前内府(平家盛)并前右衛門督清宗(平家盛)及生虜輩、下向関東、左馬頭能保朝臣、同下向云々、(書き下し)

六日 天晴る、(中略)

平家追討報賽せんがため廿二社奉幣の事

今日、平家追討の事を報賽せんがため、二十二社奉幣・宣命を行はるるの趣、去三月二十四日、魁首以下生虜既に多し、神鏡・御璽安穩歸御す、神々致す所なり、但し五凶党、宝剣海底に投げ訖んぬ、冥徳顯現すべきの子細等なり、(後略)

義経前内府已下生虜を具し下向の事

七日 己丑 天晴る、今日出仕せず、早旦、大夫の判官義経、前内府〈張藍摺の輿に乗る〉並びに前右衛門督清宗〈騎馬〉及び生虜の輩を相具し、関東に下向す、左馬頭能保朝臣、同じく下向すと云々、

7 『吉記(吉御記)』第15冊 元暦2年正月・5月・6月・7月

存17冊の内 江戸期写

公卿吉田経房の日記の写本。吉田家は「日記の家」と俗称された勸修寺流藤原氏の一門。本資料の底本は、経房の子孫甘露寺親長による長享・延徳年間(1487～92)の写本。元暦2(1185)年5月6日条には、壇の浦の戦いで平家を追討したことを朝廷が奉斎する二十二社に報告するために奉幣・宣命を遣わすこと、三種の神器のうち回収できなかった宝剣の冥徳の顯現を祈ること、7日条には、源義経が生け捕った平宗盛らを連れて鎌倉の頼朝のもとへ向かったことなどが見える。義経滅亡の悲劇は、ここに始まりを告げることになる。

[請求記号 ヨ 216-36]

☞ 高橋秀樹編『新訂吉記』本文編3(日本史史料叢刊5、和泉書院、2006年)。